[シンポジウム3]

感染症と闘った医師たち
――塩谷地区の例から――

岡　一雄
塩谷郡市医師会副会長

明治の頃までは，原因も分からず確たる予防や治療がない感染症（はやり病）は庶民に大変恐れられていた．その代表が天然痘（痘瘡，疱瘡），麻疹（はしか），インフルエンザ（流感），コレラ（虎列刺），梅毒などである．

天然痘は毎年のように流行し，たとえ一命を取りとめても顔に醜い瘢痕（あばた）を残すことが多かった．天然痘を起こす悪病神を「ほうそう神送り」という祭事でおさめる風習が県北地方に残っている．宇都宮藩領の塩谷町道下で代々村医であった青木家には天然痘の治療に難渋した記録（写真1）が残されている．江戸末期にはジェンナーが発見した牛痘種痘という予防接種が導入され各地で広がったが，同家には宇都宮藩医と協力して種痘を行った記録（写真2）も残っている．明治になると種痘法が発布，組織的な種痘の普及が進むが，県北地区は喜連川藩医であった宮脇拾（写真3）と大田原藩医であった北城諒斎により推進された．当時の種痘は有料であったため，住民が種痘費用捻出のために種痘投会社を設立してくじを発売（今の宝くじ），その利益を種痘費用に充てた地域もあった．

コレラは激しい下痢と嘔吐を伴い，発病して三日以内にコロリと死んでしまうことから「コロリ（虎狼痢，虎列刺）」と呼ばれ，恐れられた．治療法がないため，庶民は神に頼るしかなかった．喜連川神社には文久2（1862）年，コレラの退散を祝って神輿渡御が行われたことを記した額（写真4）が残されている．明治になってもコレラの流行は続き，特に明治12（1879）年の流行では全国で死者が10万人を超え，栃木県でも鬼怒川沿いに広がり，436人が死亡した．明治政府はコレラ予防仮規則で，患者発生届，防疫委員の配置，避病院（隔離病院）の設置，交通遮断，清潔消毒法などを定め，これが現在の感染症予防の基礎となった．旧氏家町上阿久津地区では西洋医学を学んだ青木信哉が防疫医として活躍し，コレラ患者を出さなかった．しかし庶民はこの地に鎮座する与作稲荷神社（写真5）の神効によりコレラが防げたと考え，近隣からの参拝者が激増，本殿を新築することになった．

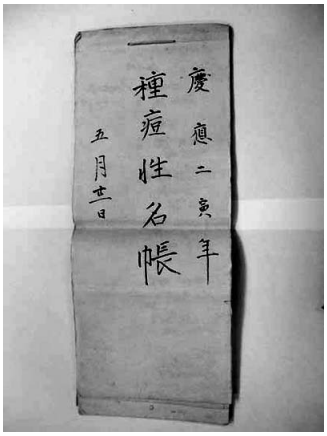

写真1　慶応2（1866）年種痘姓名帳

写真2
青木家の秘法録．天然痘の発疹や漢方治療について記載されている．

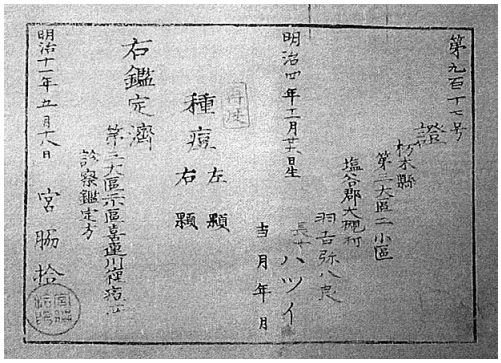
第九百十二号
證
栃木縣
第二大區二小區
塩谷郡大柳村
羽吉弥八郎
長女ハツイ
明治四年十月五日生
当月年月
種痘　左顆
右顆
右鑑定濟
第二大區二小區喜連川種痘所
設置鑑定方
明治十一年五月八日
宮脇拾

写真 3　塩谷郡各地に残されている宮脇拾の種痘鑑定済証

写真 4　喜連川神社奉納額（神輿渡御図）

写真 5　与作稲荷神社（上阿久津）